

〔資料〕

## 新型コロナウイルス感染症の影響下における基礎看護学領域の取り組み

—基礎看護方法Ⅱ（日常生活援助技術）における Teams を活用した総合演習グループワーク—

菅原 啓太<sup>1)</sup> 灘波 浩子<sup>1)</sup> 川島 珠実<sup>1)</sup>  
鈴木 聡美<sup>1)</sup> 西川 真野<sup>1)</sup> 米川 さや香<sup>1)</sup>

### 【要旨】

新型コロナウイルス感染症の再拡大に伴い、2021年1月5日から本学1・2年生は原則遠隔授業となった。そのため、基礎看護方法Ⅱ（総合演習①②）で計画していたグループワークも、Microsoft Teams を活用したオンラインでのグループワークに変更した。オンライングループワークは学生も教員も初めてであったため、準備からグループワークの運営において、我々の取り組みとその結果・学生の反応を報告する。

【キーワード】 新型コロナウイルス感染症（COVID-19） オンライン グループワーク Microsoft Teams

### I. はじめに

基礎看護方法Ⅱ（以下、方法Ⅱ）は、1年次後期に日常生活援助を中心に学習する必修科目（2単位60時間）であり、従来、講義と演習を組み合わせた授業展開としていた。講義は、1年生全員（約100名）で行い、演習は内容によってクラス別（約50名）で実施する場合もあれば、100名で実施する場合もあり、教員6名（業務職員を含む）で担当している。しかし、新型コロナウイルス感染症の再拡大に伴い、1年生と2年生の授業を原則遠隔授業とすることが1月4日に決定した。そのため、方法Ⅱにおいても、学内で予定していた対面での講義・演習から、Microsoft Teams（以下、Teams）を活用したオンライン授業に変更することとなった。方法Ⅱの最終授業として計画していた総合演習のグループワークも、オンラインでのグループワークに変更し実施した。Teams を活用したオンラインでのグループワークは、学生も教員も初めての経験であったため、我々の取り組みとその結果・学生の反応をここで紹介する。

### II. 授業展開の実際

#### 1. 授業内容・方法の検討

基礎看護学領域における総合演習とは、単一の技術を学習する他の単元の演習とは異なり、これまでに学習した知識や技術を複合させ、事例に合わせた援助方法を学生たちが主体的に創造することを目指すものであり、基礎看護方法の各科目でこの形態の演習を取り入れている。方法Ⅱにおいても、1月7日（木）に、事例に合わせたオムツの交換方法をグループで検討する総合演習①（1コマ）を計画していた。しかし、遠隔授業では実際にオムツに触れながら、オムツの交換方法をグループで検討し、試行錯誤する演習ができなため、このコマ数を最終授業の総合演習②（1.5コマ）と合体させて、事例患者に対して、これまで学んだ援助技術の提供を検討する授業に変更することとなった。

#### 2. 総合演習①②の概要

##### 1) 単元の目的・目標

総合演習①②の学習目的は、「既習の知識と技術を複合させ、事例患者に対し、安全・安楽・自立を踏ま

1) Keita SUGAWARA, Hiroko NAMBA, Tamami KAWASHIMA, Satomi SUZUKI, Mano NISHIKAWA, Sayaka YONEKAWA : 三重県立看護大学

えた援助方法を、グループワークを通して検討することができる」とした。

学習目標は、以下の3点を設定した。

- (1) 事例患者の状態について、情報を収集することができる。
- (2) 収集した情報から、必要な援助を見いだすことができる。
- (3) 収集した情報から事例の患者に合わせた援助方法を考えることができる。

## 2) 単元計画

学生が、得た情報から患者に必要な援助を導き出すことができる十分な時間を確保するために、総合実習①②は2週に分けて実施することとした。総合演習①の実施前に、学習目的・目標、グループメンバー、演習課題、演習スケジュールを演習ノートとして配信した(図1)。グループ配置は、学生5~6名を1グループとし、計18グループとした。演習スケジュールは、総合演習①(1月21日)では、事例患者の情報を収集し必要な援助の検討、総合演習②(1月28日)では、具体的な援助方法の検討、という展開にした(表1、2)。総合演習①では翌週の総合演習②の事前学習として、グループで検討した援助の方法について、各自が具体的に調べたり、考えたりすることを課題とした。

## 3. 事前準備

### 1) 事例の設定

初学者である1年生が、障がいや日常生活の不自由さをイメージしやすい、脳梗塞保存治療中の高齢者で、学生がこれまで学んだ看護技術(環境、活動、清潔・衣生活、食事、排泄、バイタルサイン測定等)が活用できるように、市販のDVD<sup>1)</sup>の事例を活用した。学生には、演習ノートに記載した文字情報とDVDを使用した病室の患者の映像情報(図2)の2種類を提示し、臨床現場で情報を収集する臨場感がもてるように工夫した。なお、学生が患者自身や周囲の環境等の観察から情報を得ることを重視し、演習ノートに記載した情報は最小限にとどめるように心がけた。

### 2) Teamsの準備

Teamsでオンライングループワークを実施する場合には、全履修生および教員が一堂に会するメインルー

2020年度 基礎看護方法Ⅱ  
1/19配信 担当: 菅原・鈴木

**【総合演習①②】 演習ノート**

- ✦ 目的  
既習の知識と技術を複合させ、事例患者に対し、安全・安楽・自立を踏まえた援助方法を、グループワークを通して検討することができる。
- ✦ 目標  
1) 事例の患者の状態について、情報を収集することができる。  
2) 収集した情報から、必要な援助を見いだすことができる。  
3) 収集した情報から事例の患者に合わせた援助方法を考えることができる。  
4) グループワークや全体発表・質疑応答において積極的に意見交換することができる。
- ✦ 演習日時: 2021年1月21日 ABクラス 16:20~17:50 総合演習① 90分  
2021年1月28日 ABクラス 13:00~15:15 総合演習② 135分
- ✦ 演習場所: Teamsを使用したオンラインでのグループワーク
- ✦ 演習内容: 事例患者の情報を収集し、必要となる援助の方法をグループで検討する。
- ✦ 演習の留意点  
1) 演習までに本資料をよく読み、当日の流れを理解しておくこと。  
2) 学生同士のグループワークでは各自がカメラ・マイクを入れた状態で実施する。学習環境によりどうしても難しい場合は、事前に教員(菅原か鈴木)に連絡をすること。  
3) 演習時には本演習ノートの他に、基礎看護技術のテキスト、これまでの講義・演習の資料を準備しておくこと。  
4) グループの学生と積極的に意見交換をしながら演習を進めること。
- ✦ 演習課題  
【事例患者】  
電子カルテからの情報  
・ 伊藤和男 80歳 男性  
・ 脳梗塞と診断され保存治療で入院中  
・ 左不全麻痺があるが、右手の支持で立位保持は可能  
・ 病棟内は車いす移動  
・ コミュニケーションに問題ない  
・ 毎日、午後1時にリハビリを1時間実施している。  
看護記録の情報  
・ お浴で清拭をしたのが4日前、シャワー浴をしたのは6日前  
・ 口腔ケアや褥瘡処置は毎日実施している。  
・ 朝のバイタルサイン T: 36.5℃、P: 82回/分、R: 24回、Sp: 120/76mmHg  
娘からの情報  
「父はきれい好きだったのに、もともと身だしなみには気を遣う人でした」

看護学生であるあなたは、午前10時に伊藤さんの病室を診察しました。  
伊藤さんの情報を収集し、伊藤さんに必要だと思う援助方法をグループで考えてみましょう。

図1 演習ノート

ムの他に各グループの小部屋(以下、各チャンネル)が必要となるため、18チャンネル(小部屋A~R)を作成した(図3)。各チャンネルは、メインルームとの行き来が可能である。この機能を活用し、メインルームでオリエンテーションや全体へのフィードバックを行い、グループワークは各チャンネルで行うこととした(図4)。なお、Teamsの設定上、1つのチームに作成できるサブチャンネル数は10チャンネルまでと制限があったため、A・Bクラスそれぞれのチームを準備する必要がある。

## 3) オンライン対応の為の準備

### (1) 対応する部屋の準備

Teams内でのメインルームとチャンネル間の移動は、教員にとっても学生にとっても初めての試みであったため、学生が指定されたチャンネルにうまく移動できない可能性や、ネットワークの接続等の問題が生じた場合に、主担当教員だけでは対応しきれないことが懸念された。そのため、基礎看護方法を担当する全教員(6

表1 総合演習①（1月21日）の授業展開

時間		内容	備考
16:20～	25分	【オリエンテーション】 各チャンネルへの移動練習含む	メインルーム
16:45～	10分	【事例患者の紹介】 DVD 視聴	メインルーム
16:55～	25分	*グループワーク①事例患者の情報収集 *グループワーク②必要な援助の検討	*各チャンネル
17:20～	10分	【必要な援助の発表】	メインルーム
17:30～	10分	*グループワーク③実施する援助の選択と根拠の検討	*各チャンネル
17:40～	10分	【まとめ】 グループで作成した計画用紙の提出 次回までの課題説明	メインルーム

表2 総合演習②（1月28日）の授業展開

時間		内容	備考
13:00～	10分	【オリエンテーション】	メインルーム
13:10～	90分	*グループワーク④具体的な援助方法の検討 グループで作成した計画用紙の提出	*各チャンネル
14:40～	25分	【援助方法の発表】	メインルーム
15:05～	10分	【まとめ】 授業評価	メインルーム



図2 患者の映像情報  
※加工しています。



図3 チャンネルのイメージ

名)が1部屋に集合し、学生の参加や移動の状況を共有するとともに、トラブルに対応できるようにした。また、授業1週間前には、教員全員でオンラインの接続状況やカメラ・マイク・ヘッドホンの使用状況、自由自在に各チャンネルへ移動できることを確認するとともに、グループのファシリテートを行うイメージをつけるために、オンライングループワークのシミュレーションを行った。

## (2) 物品や記録用紙の準備

教員用として、ノートパソコンやWebカメラ、マイク付きヘッドホン等を一人1台準備した。また、各グループの学生が、ディスカッションを行いながら記録用紙(Wordファイル)の共同編集ができるように、授業前に各チャンネルのファイル内に、記録用紙を保存した。

## 4. 授業の実際

総合演習①のオリエンテーションは、メインルームで、学習目標の確認やグループワークの実施方法、各チャンネルへの移動方法について説明した。その際、練習を兼ねてグループのチャンネルへ移動してもらい、グループの役割(司会、書記、タイムキーパー、発表者)を決めてもらった。各チャンネルに移動し、学生だけの空間で役割を決めることで、グループメンバーの顔合

わせと時間管理を含めたグループワークを学生主体で行う導入にしたいという狙いがあった。

最初は自分のグループのチャンネルへどのように移動すればよいのかわからず戸惑う学生もいたが、一度チャンネルへの移動を体験したあとは、ほぼ全員がスムーズにメインルームとチャンネルとの移動を行えるようになり、学生の対応能力の高さを垣間見ることが出来た。

グループワーク中は、カメラをonにし、顔を出して積極的にディスカッションを行っているグループ(図5)や顔出しをせずに声だけでディスカッションを行っているグループがある一方で、顔出しも会話も全くせず、記録用紙の共同編集だけを行っているグループもあった。本演習は、学生同士がディスカッションすることで、多様な視点に気づきながら、単一の援助方法にしぼられるのではなく、自由な発想で援助を作り上げていく楽しさを体験してもらいたいという狙いがあった。そのため、記録用紙を完成させるよりも、学生同士のディスカッションを促そうと教員が介入したが、うまくファシリテートできなかつたグループもあった。これは、初めてのオンライングループワークであり、画面上に顔をうつしたり、発言したりすることに抵抗感があった可能性が考えられた。また、最終的に記録用紙の提出を課していたため、とりあえず用紙を記入することに必死になってしまった可能性も考えられた。導入時にアイスブレイクの時間を設けて、グループの

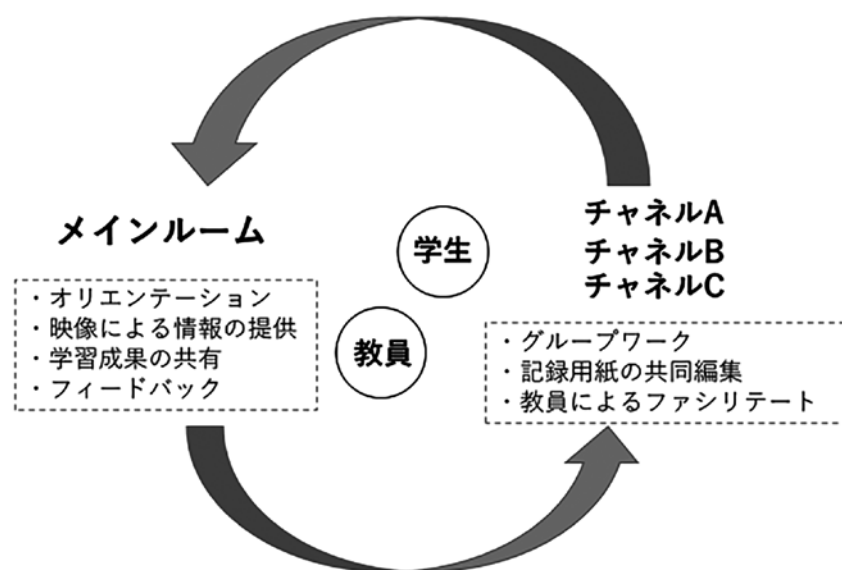


図4 オンライングループワークのイメージ



図5 学生のグループワークの様子

凝集性を高めておくこと、記録用紙の提出は課さず、ディスカッションの時間を十分に確保する等の配慮が必要であったと考える。

グループワーク中に各教員が各チャンネルに参加することは、学生に事前説明し、困っていることや質問に対応した。その際の様子を図6に示す。当初、教員が不在の時に学生が質問したい場合は、主担当教員へメールで連絡してもらうこととした。しかし、主担当教員も各チャンネルに入って学生対応を行っていたため、メールを確認する時間の確保が難しく、タイムリーな対応ができなかった。学生の質問を確認する役割をもつ教員を一人置く必要があった。また、学生にとっては、教員が予告なく、突然各チャンネルへ入ることになるため、驚かせたり、ディスカッションを中断させてしまったりする一方で、学生が教員に全く気付かず指導のタイミングを計りかねたりする等、各チャンネルへの入り方が難しかった。事前に、教員が入る時間や入った際のお知らせ方法を決めておく等の工夫が必要である。

各チャンネルでのグループワーク終了後は、他のグループの意見を聞くことで学びを深めるために、グループで検討した具体的な援助方法を発表する時間を設けた。時間的に発表できるのは、一部のグループに限られたが、その決定方法は主担当教員が引く『くじ』であることを事前に周知し、全てのグループが発表できるように準備を促した。各グループがそれぞれ作成した記録用紙は、全体で共有するためにメインルームのフォ



図6 教員のグループワーク指導の様子  
※感染予防の為、常時換気を行い、  
教員同士の間隔をあけた状態を保った。

ルダに保存し、受講生全員が閲覧できるようにした。学生は、他のグループが発表する際は、共有した記録用紙を閲覧しながら発表を聞くことが出来ていた。

### Ⅲ. 授業の評価

#### 1. 学生の反応

##### 1) 総合演習①終了後のForms回答より

学生の学びの満足度は、5段階中4.5±0.8であった。学生からは、「Wordをみんなで打ち込めるため、み

んなで意見共有しやすくて良かった」等のファイルを共同編集できたことや、「オンラインでのグループワークは不安だったが、思っていたよりも意見交換がちゃんと出来た」や「グループで話し合うことで自分では思いつかない意見が聞けた」等のグループワークの効果を実感できていたこと、「グループで患者さんのことを第一に考えた援助が考えられた」等の患者中心の思考ができたこと、「カメラオンにすると、活発に話し合いが出来たし、みんなの顔も見ることが出来てよかった」といった意見があり、概ね好評であった。また「DVDを見たときに、患者さんの言葉と表情しか見ていなかったの、服装や汚れなどにも注目しようと思った」等の気づく力への言及もあった。一方で、「徐々に友人の顔を見て話し合いを行うことに少し緊張した」や「画面越しだったので、スムーズな意見交換が出来なかった」等のオンラインで行うグループワークに対する戸惑いの声も少なくなかった。冬季休暇明けすぐに遠隔授業となってしまったため、学生同士が顔を合わせることも久しぶりであったことの影響とグループワーク自体に不慣れな1年生がオンライン上でグループワークを行うことに気まずさや心理的抵抗感を抱いた様子が伺えた。

## 2) 総合演習②終了後のForms回答より

学生の学びの満足度は、5段階中4.9±0.4であった。学生からは、「他のグループの発表を聞いて新たな注目を発見できてよかった」「グループによって実施する技術がさまざま、同じ技術でも方法が違っていたりして面白い」等、他のグループの発表から学びの広がりや深まりがあったこと、「グループで、患者さんのための計画を練る過程が楽しかった。」「正解とかではなく患者のために援助をすることが大切」等、患者中心の看護の醍醐味を感じていたこと、「今までに学んだ援助方法を組み合わせることで、当時の授業内では浮上しなかった問題点が浮上したので、それについて考えることにやりがいを感じた」等、既習内容を発展させた学習の喜びに関する意見もあり、全体的に総合演習①よりもポジティブな意見が多かった。一方で、「もっと積極的に発言すれば良かった」「メンバーがなかなか発言してくれず、役割分担もよくなかったみたいで、上手く進行、資料を仕上げるのができなかつ

た」等の今後の課題に関する記載もあったが、総合演習①の感想にあったようなオンライン上でのやりにくさに対する意見はわずかであった。

## 2. 教員の授業評価

各グループが作成した記録用紙を概観するに、グループごとに検討した内容は様々であったが、今回の総合演習の目標は、概ね到達できたと考える。

情報収集<学習目標 (1)>においては、DVDに観察の視点のナレーションが入っていたことから、事例患者の重要な情報に気づき、援助の根拠に挙げることができていた。また、意識して観察しなければ見落としてしまう可能性にも気がつき、援助計画の中に観察やバイタルサイン測定を加えていたグループが多かった。

必要な援助<学習目標 (2)>においては、シャワー浴や清拭、足浴だけでなく、寝衣やシーツの交換、髭剃り等の身だしなみを整える援助まで幅広く検討することが出来ていた。

患者に合わせた援助方法<学習目標 (3)>においては、情報収集したことを踏まえて、室温への配慮や説明や言葉かけの内容まで詳細に検討されていた。

以上より、学生はグループで、情報収集を行い、情報から必要な援助を見だし、患者に合わせた援助方法を考えることができていた、と評価する。

## IV. おわりに

今回、学内で講義や演習が実施できない状況になってしまったものの、Teamsを活用したオンラインでのグループワークにより、学生が主体的に学ぶ環境を整えることができたこと、オンラインでのグループワーク方法を学生だけではなく教員も新たに体験できたことは大きな収穫といえる。いくつかの課題は残るものの、漫然と受動型の授業を行うのではなく、事前学習を中心としたオンラインでのグループワークは学習効果が期待できると考えている。

## 【文献】

- 1) 三浦友理子, 奥裕美, 松谷美和子監修: 臨床判断 気づくトレーニング 第1巻 基礎看護学実習編, 東京サウンド・プロダクション, 2018.